

タイ王国 前国王の思い出 新国王への期待

佐藤 幸憲 陸自60

プミポン前国王が昨年10月に逝去され、ワチラーロンコーン皇太子が12月新国王に即位された。

1 前国王の思い出など

前国王は多くの国民の尊敬を受け、王妃との写真は国中至る所に掲示されている。タイの映画館でも、開演前に国王夫妻の写真と、国王賛歌に出合うことになるが、身近に接する機会は多くはなかった。それでも私には、国王の思い出がいくつかある。

私は、タイ陸軍参謀学校（陸自幹部学校指揮幕僚課程に相当）に1年間留学し、1978年10月の卒業式には、国王から直接卒業証書をいただき、その模様はテレビや新聞で報道された。

どこの国でも重要行事は、予行が繰り返されるのは同じ。だが、国王から卒業証書を受け取る際、右手首の捻り方が作法に合っていなかったのか、何度もやり直しさせられた。

また、国王の前では、目を伏せたままとされ、国王を直視してはならないと念を押され、十分に心していたはず

が、何としたことか、その瞬間顔を上げてしまい、一瞬目が合った。厳しい眼であられた。

国民に接している写真に見る温和な表情の眼ではなかった。国王が以前目を痛めておられたことは承知していたが、眼光の強さは、やはり無礼な留学生をおとがめになったのだろうか。それとも数々の試練を乗り越えられ、王制を確固たるものとした自信と威厳が備わってこられたためだろうか。

次に国王に近く接したのは、陸軍士官学校で卒業式に引き続き行われた任官式で、国王が軍刀を授与された時である。椅子に座られ、一人一人を見つめつつ、丁寧な動作で軍刀を授与され



前国王 卒業式における佐藤氏
白制服は特例として認められている（本人談）

る姿から、祝福と信頼の思いが伝わってきた。素晴らしいことだと思った。

もう一つは、国王誕生日行事として、前夜に各界の指導者たちを集めて玉座から直接、国民にテレビを通じ、語りかける口調で思いを述べられたことである。当日の観閲式においては、国軍最高司令官として閲兵され、颯爽とした姿であられた。

前国王は、ラッタナコーシン王朝第9代で、ラーマ9世と呼称された。1927年12月5日、米国ボストンでラーマ7世の次男として誕生、のちにスイスに留学された。

1945年第2次大戦の終結に伴い、タイ国は日泰同盟の敗戦国となったが、巧妙な外交努力と国際情勢の急変が幸いし、独立を保持した。

この年、成人した兄は英国から帰国、摂政を廃しラーマ8世として王位に就いた。しかし複雑化していた政局のなか、公務に積極的意識を持った青年国王は、翌年6月、王宮内で夜間、銃弾により変死された。容疑者とされた者達は、長期裁判の後、極刑となったが真相をこれ以上糺そうとする者は今後も現れないだろう。

急ぎよ、次男が19歳で即位された。ラーマ9世である。国王としての活動は1950年の結婚後から始まり、王

妃と共に国内各地を御訪問。多くの王室プロジェクト、音楽演奏、作曲等、多彩な活動を通じ、次第に国民の敬慕の対象となっていた。

この間、国王は国内情勢、国際情勢についても複眼的に考察されていた。タイ国が、泥沼化したベトナム戦争間、作戦、兵站基地と化し、またその後、国内及び国境地区で共産ゲリラが跋扈した時代で、500名以上の軍人・警官・村長等が戦死、殉職した。その慰霊祭では、自ら祭王を務められたが、悲しみの姿を末席から拝見した。

引き続き「カンボジア問題」、急速な経済発展に取り残された貧困層の現状と不満の蓄積等を実視され、鋭敏な感覚と共に次第に確固とした国家像が出来上がっていったのではなからうか。

この国家像が、大きく崩れる危険を察知した時、特に1970年以降、国王が政治の事案に発言されることが多くなった。そこに、発言のタイムミング・内容に、優れた時代感覚を感じる。根底にしっかりと信念があったからであろう。このように考えると、負のイメージを持つ「政治介入」という表現は、気の毒な気がしてならない。

特に強烈な印象を与えたのは、「国のかたち」が歪む危険を察知し、身を挺して行動した1981年4月のクイーデー時である。

政府主要機関、放送局等がクーデター側に占拠され、首都が制圧されつつあったとき、国王は断固として決起軍の行動を認めず、信頼するプリーム首相（現枢密院議長）を伴い、王族を連れて王宮を去り、第2軍管区司令部のある東北地方のナコーンラーチャシーマーへ避難された。

この日、東京都内で私の防衛駐在官歓迎会が行われた席上、この話が伝えられた。共同通信で活躍した元記者が、「これは蒙塵（もうじん）だ」と大声を出したことを憶えている。「蒙塵」とは、天子が難を避けて他所に逃れたことで、約2百年のタイ王朝で初めてのことであった。

このクーデターは軍管区副司令官アーティット中将（後、大将、陸軍司令官）により鎮圧された。その後、アーティット陸軍司令官から記念に戴いた礼帽が、今も私の部屋にある。これを見る度に国王の決意を思い出す。

また、未遂クーデターに参加し軍籍をはく奪された参謀学校同期生2名が、同年秋の同期生会に私服姿でしおらしい姿を見せたが、同期生から爆笑をもって迎えられたことを思い出す。

昨年のトルコのクーデター未遂者への厳罰に比較すると、タイ王国の国情、国民性がよく判る。

世界の注目を集めたのは、1992年5月の政変時である。対立した軍出身首相と反政府勢力の指導者を呼び「国王の裁定」で終結させた。その時の国王の話しぶりと、国王の前にひれ伏す写真が世界中に配信されて話題になった。

それ以前、私の現役時代、米国へ行く途中の皇太子と王妃が成田空港で乗り継ぎ時にお迎えした際、VIPルームのソファに座る私たちの前で、歩み出した旧知の在日タイ大使がひれ伏す姿を拝見し、落ち着かない気分になったことがある。しかしこれは、タイ国民の決めているしきたりだった。

国王は王妃と共に王朝で最も存在感を示し、国民の敬愛と信頼を受け、国家の安定に努めてこられたこと、世界で最長の在位となったことなど、長く歴史に残ると思われる。ご冥福を心から祈りする。



2006年御訪問（佐藤氏提供）

わが皇室とタイ王室との交流は、プミポン国王及び王妃が、昭和38年に訪日されて以来、50年以上の親密な歴史を育まれてきた。天皇・皇后両陛下はベトナム訪問後、バンコクに向かわれ、3月5日、前国王の棺が安置されている王宮を弔問された。



新国王

2 新国王への期待

ワチラーロンコーン皇太子は、昨年12月1日、新国王に即位された。ラッタナコーシン王朝第10代「ラーマ10世」である。1952年7月28日生れ。前国王の長男で、姉1人、妹2人がおられる。オーストラリア陸軍士官学校卒、歩兵大隊長を終え、中佐となり、参謀学校に入学した。（「偕行」2014年9月号「わがクラスメイト・タイ国皇太子」参照）

私は、国王の皇太子時代から毎年正月にご家族の写真を載っており、それが37年続いてアルバムが2冊になっ

た。この間、何度か、気懸かりな写真の年があった。1980年代に前国王は、身近な国王を援けた聡明さと、明るい性格で国民に人気があった次女シリントーン皇女に、皇太子と同等の王位継承を可能とする呼称を与え、国民を驚かせたことがある。正月の写真が、この件と何らかの関連があったのかも知れない。

前記の「偕行」記事以降の出来事では、皇太子妃が身内の不祥事から自ら身を引く形で離婚されたことである。お二人の間には、12歳になる皇太子がおられる。昨年正月の写真は、国王の快癒を願って行われた全国自転車ラリーの先頭を快走するお姿であった。

今年1月中旬、国王秘書サティボン空軍中將から、「国王の命により」として喪中を示す封書に入れられた「今年の幸せと健康を祈ると共に、今後ともよろしく」というご挨拶状を戴いたのみである。

新国王には、前国王を支え、国民の敬慕を得ていた王妃のような存在がないことは、不安でもある。しかし既に約10年間、国王の代理を務める経験も積まれており、新たな独自の国王のあり方像も形成しつつあると思われる。また、民政移管問題の中のスタートではあるが、支配層、軍部の抑制的言

動のもと、地域で唯一残る王制はタイ国民の誇りであり、その重要性を国民が理解支持している以上、人気を意識することなく「公正」「誠実」に、そして国民に接する機会を増やし、敬愛される存在となられることを、切に願っている。

新国王の戴冠式は、喪が明ける10月以降、68年ぶりに盛大に行われることになる。新国王のスタートを心から祝福し、ご発展を祈りたい。

(追記)

新国王は、皇太子時代からタイ国軍人の防大留学に深い関心をお持ちだった。訪日された際、防大訪問を予定していたが、急用のためそれはかなわなかった。

昨年10月防大留学生卒業ジヨム・ルンサワン空軍大將（防大26期）が空軍司令官に就任した。昨年まではタナラット・ウボン海軍大將（防大23期）が前海軍参謀長を務めたことに続く快挙である。

また、平成26年春、初代防大留学生チヨンチェン氏（防大6期）が外国人叙勲として旭日双光章を、昨年春は、タナラット大將が旭日重光章を、それぞれ防大同窓会タイ支部長（前、及び現）の功績により受章した。軍事交流の成果といえよう。